

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 22 日現在

機関番号：10101
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23701020
 研究課題名（和文） 映像コンテンツの制作・アーカイブ化に関する新たな学芸員養成教育プログラムの開発
 研究課題名（英文） Development of New Curator Training Program Focusing on Video Production and Archiving
 研究代表者
 藤田 良治（FUJITA YOSHIHARU）
 北海道大学・総合博物館・助教
 研究者番号：40515102

研究成果の概要（和文）：

現行の学芸員養成課程のメディアリテラシー教育においては、映像の制作およびアーカイブ化を行う実践的な教育が十分にはなされていない。また、博物館では映像制作を外注し、学芸員が自ら映像制作を行うこともほとんどない。このため、撮影した映像資料・素材のアーカイブ化も体系的に行われていないのが現状である。本研究では、映像資料を扱う学芸業務をカバーする学芸員の養成が必要だと考え、映像の制作とアーカイブ化に関する知識とスキルを兼ね備えた学芸員を養成するための教育プログラムを開発した。将来的には、高度な映像の制作能力やメディアリテラシーを備えた上級学芸員へのステップアップを目指したリカレント教育への応用を視野に入れている。

研究成果の概要（英文）：

In the media literacy education in the current curator training course, practical education to perform the video production and archiving is not fully conducted. On the other hand, the museums order the video production to other companies and the curators do not produce the video contents by themselves. Accordingly, archiving of the video materials is not carried out systematically. In this study, since I think the curators who can cover the curator-related work on video contents and materials are required, I developed the curator training program for video production and archiving. In the future, I will also apply it to the recurrent education for stepping up to senior curator.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：博物館学・博物館学

キーワード：博物館情報学

1. 研究開始当初の背景

<博物館における映像の位置づけ>

博物館は、歴史・民俗・考古・自然・美術など各分野の価値ある資料を保存・研究し、その意義をメッセージとして社会に伝え、来館者の当該分野への興味・関心を高めることを使命の一つとしている。

(1). 映像展示はメッセージを伝える手法と

して既に多様に使われており、実物標本のメッセージを補完する役割を担っている。また、後世に伝えるべき資料の一種でもあり、かつアーカイブ化するためのツールとしても有効である。

(2). しかし、残念ながら映像が持つこれらの可能性を十分に活用できていない。映像は国や地域を超え文化や教育、研究とい

った分野にまでも影響を与える共通言語として重要な位置にある。映像に関心をもつ人々が多いものの、実際に映像制作の教育を受け、知識やスキルを持つ人材は非常に少ないのが現状である。

- (3). 第3期科学技術基本計画では、デジタルコンテンツ制作など新たなニーズに対応した人材の養成が求められ、文部科学省においては「デジタルミュージアムに関する研究会」が設置され、デジタルコンテンツの積極的な活用が求められている。また、社会の多様化に対応できる高度な知識やスキルを必要とする上級学芸員や、現職学芸員に対するリカレント教育への期待は高まりつつある。
- (4). 国内外には、プロの映像制作者を養成する高等教育機関が存在する。これらの教育機関における専門的なカリキュラムから、学芸員の職務に必要な映像に関する制作知識やスキルの指導内容を抽出する。つまり、学芸員を養成するための教育プログラムに組み込むための映像制作を専門とした教育カリキュラムの調査が必要である。
- (5). 博物館や大学には、過去に撮影された学術標本や資料にまつわる多くの映像資料が8mmテープや映画用フィルム等さまざまな媒体で残されているが、体系的に保管されるまでには至っていない。また、撮影により記録される映像素材は、デジタルデータ化された場合、ハードディスク等に格納されるが、そのままではやがてデータの散逸となり、二度と使用されずに消えてしまう恐れがある。過去に行われた研究やさまざまな資料を収録した映像は、科学史あるいは社会学としても重要である。
- (6). 本研究では、学芸員がさまざまな状況下で映像素材を保存・整理・活用する際の参考となるように、他の機関における映像素材のアーカイブ化の事例を調査・収集し、そのノウハウを体系化する。

2. 研究の目的

- (1). 平成24年度の学芸員養成科目の改正が目前となった時機に、映像コンテンツの制作スキルをもった学芸員を養成するための映像コンテンツ制作教育プログラム（以下教育プログラムとする）の開発研究は喫緊の課題であり、そのような人材の養成には大きな意義がある。
- (2). 本研究では、学芸員養成課程での映像の

制作・アーカイブ化の教育プログラム開発を目的とする。この結果、教育プログラムを受けた学芸員は、映像制作の知識とスキルを身につけ、メディアによる報道を批判的に読み解くだけでなく、メディアの成り立ちと特徴を理解しメッセージを的確に伝えるツールとしてのメディアを活用できる能力、すなわちメディアリテラシーを身につけられると考えられる。

- (3). 学芸員による映像制作の意義と本研究の特色として、博物館では、今まで以上に映像コンテンツを展示に活用したいと考えているが、映像コンテンツは制作費が高く容易に発注できないのが現状である。また、現在の学芸員教育で行われている映像関連の教育内容は、学芸員が自ら映像コンテンツを制作するための教育はほとんど行われていない。博物館の学芸員が映像コンテンツの制作技術を身につけ実際に制作するもしくは、外注した場合でも質の高い数多くの映像コンテンツを展示でき、ひいては博物館の活動も活性化していくと期待できる。本研究により期待される成果は、学芸員に対する効果的な教育プログラムの体系化であり、最終的には映像コンテンツという魅力あるツールを積極的に活用し、博物館や大学の資源が再び活性化することである。
- (4). 映像教育がもつ可能性と他の領域への期待される波及効果では、申請者が、北海道大学の科学技術コミュニケーター養成ユニットで映像コンテンツ制作を指導してきた。その間、初めて映像制作を学んだ受講生が研究内容を映像で表現し学会発表や論文の一部として活用した、映像コンテンツに応募できるレベルの作品を制作する力を身につけ、科学映像制作会社へ就職した受講生等を養成することができた。自らの経験を踏まえ、映像制作コンテンツの企画立案や素材収集、機器の操作に関する教育を、映像に関する実務・指導経験をもつ指導者から受けることで、初心者でも自己満足のレベルでなく他の人々からも評価される映像コンテンツを制作できることを知り、より一般化した映像教育の需要と可能性を実感した。映像制作の現場では、さまざまな技術が暗黙知として継承されているが、本研究では、学芸員に対しても指導すべき映像制作スキルの明確化・マニュアル化を試みる。これにより、必ずしも映像制作の専門家による指導を受けなくとも、学芸員に必要な映像

制作スキルを身につけられる教育プログラムを確立し、より多くの人々に映像制作スキルを広めることができると考える。

- (5). デジタル映像機器が普及した現代社会において、メディアリテラシーや映像機器を使う能力を備え、さまざまな課題に対応できる高度な知識やスキルをもった上級学芸員が求められ、学芸員のリカレント教育としての映像教育に対する期待は高まりつつある。科学館や資料館においても学芸員と類似な職種があり、これらの人々への教育としても、本研究で構築する教育プログラムが活用できると考える。さらに、開発された教育プログラムは学芸員実習における受講生のみならず、大学に所属する学生・大学院生、教職員に適用することにより、ファカルティディベロップメント (FD) や、昨今社会的に要請されている研究者の専門的な研究内容・成果を広く発表し、社会からのフィードバックを得るためのアウトリーチ活動にも応用できると考える。

3. 研究の方法

- (1). 高等教育機関における映像教育、博物館の映像コンテンツに対する意識と実態調査学芸員に特化した映像制作教育は先行事例がないため、研究協力者と情報交換を重ね学会に参加し、マスメディア等への就職を目指した映像制作教育を指導している高等教育機関に焦点を絞り、国内外の映像制作教育の専門機関（日本大学、筑波大学、オタゴ大学等）でカリキュラム等の実態やヒアリングによる調査（シーズ調査）を実施した。また、博物館における映像コンテンツに対する意識・実態調査（ニーズ調査）を行い、学芸員の実情に合った教育プログラムを制作する上での知見とした。これらの映像教育の専門機関における教育や博物館での映像コンテンツの活用事例に関しては、現在すでにシンポジウムでの情報交換や文献調査を実施した。
- (2). 映像素材の管理は、映像コンテンツ制作教育において必須の指導項目である。学芸員が将来活動する博物館の規模等の実情に応じた、さまざまな状況下で映像素材を保存・整理する際の参考となるように事例を集める必要がある。映像のアーカイブ化を進めるにあたり、そのノウハウを吸収するためにも他の機関で行われている方法の調査を行った。

- (3). 教育プログラムの設計として、学芸員養成のための授業科目「博物館実習」(2単位)での実施を想定して教育プログラムを作成した。ここでは、メディアリテラシーとして必要な映像制作の企画から完成までの流れを体系的に学ぶことができるように設計した。なお、限られた時間数で効率的にスキルを身につけられるよう留意し、授業案の作成を行った。

- (4). プロトタイプ授業の実施では、平成24年度に開講した「博物館実習 博物館映像表現」に実装した。映像コンテンツ制作を希望した9名の学生を対象に、開発した教育プログラムに沿って実践的な映像コンテンツを制作させた。この映像コンテンツは、制作者並びに関係者の同意を得て、授業や博物館の展示、インターネット等で発表・公開している。本研究による教育プログラムは、平成25年度以降も活用できるよう、質の高い教育プログラムを目指して改良を重ね、北海道大学で行う博物館実習に積極的に取り込んでいる。教育プログラムの実施時のすべての過程は記録し、検証材料として活用しWebサイトでも一般へ公開した。万一、学生に対する博物館実習を実施できない場合は、学生・教職員・博物館ボランティア等を対象に自由参加型の映像コンテンツ制作ワークショップを開催し、教育プログラムの効果・実効性を検証することも検討した。

- (5). 構築した教育プログラムの評価観点は、
① 期待したスキルを習得できたか
② 専門性の高い教育プログラムが学芸員の特性に合わせた内容になっているか
等とした。この教育プログラムと評価を成果とし、他機関で活用できるように成果物を広く公開した。

- (6). 実習を受けた学生には、映像コンテンツ制作のワークフロー、企画を映像化するためのスキルについての理解度や教育プログラムに関するアンケートやインタビューを行った。

- (7). 学生が制作した映像コンテンツを博物館に所属する関係者が「企画性」「ストーリー性」「表現力」の観点から評価した。

- (8). 学生が制作した映像コンテンツを可能

な限りインターネット上で公開し、一般からの評価コメントを得られるようにした。このコメントは、映像コンテンツを制作した学生に伝え、本人が意図した映像コンテンツを制作できたどうかを客観的に判断する材料とした。第三者からの評価としては他に、識者からもコメントをもらい学生へフィードバックした。

4. 研究成果

本研究で開発した学芸員養成教育プログラムを実装した「博物館実習 博物館映像表現」を受講した学生 125 名にプログラム受講前後に学芸員が映像制作スキルや知識が必要かアンケートを実施した。その結果、映像制作スキルや知識が必要と答えた受講生は、受講前のアンケートでは 40 パーセントであったが、受講後は 90 パーセントになった。

更に「期待したスキルを習得できたか」という問いには、「映像制作のプロセスが身についた」、「自分で映像制作が思ったより簡単にできた」という意見がある一方で、「映像制作スキルを身につけるには、90 分という授業時間では短い」、「授業を請受けている (125 名) の人数に対して教員がひとりでは指導が行き届いていない」という厳しい意見もあった。

これらのネガティブな意見を参考に、3 日間の短期映像制作プログラムを開発し、「博物館コミュニケーション特論Ⅱ 映像表現」として博物館における映像制作の授業を行った。受講生数は、12 名と「博物館実習 博物館映像表現」の 10 分の 1 となり各自の持つ撮影機材を用い受講生ひとりにつき北海道大学の所有する情報端末 1 台を使用して映像編集を行った。受講生のほとんどが映像制作を初めて行ったが、基礎から映像制作スキルを学ぶことで短期間の間に映像制作知識とスキルと知識を身につけることが出来た。学芸員としての必要な映像制作に関する知識やスキルを身につけるには、大人数に対応した座学中心の授業から個別指導可能な少人数で対応することで効果が上がることがわかった。

本研究の成果から北海道大学では、高等教育向けに改善を加え、博物館が行う映像制作の授業として 2 単位の授業を夏と冬の集中講義として開講した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

足尾銅山で撮影された写真のデータベース化 2012年8月 法政大学多摩研究報告 藤

田貢崇、藤田良治、西成典子、永田浩三、小野崎敏、小出五郎 Vol. 27、pp. 39-44、査読無

高等教育・社会人における映像教育カリキュラムの実例と検証 ―学芸員養成科目改正を前に 2011年6月8日サイエンス映像学会誌、藤田良治・藤田貢崇、pp.1-11、査読有

[その他]

ホームページ等

2012 年度 博物館コミュニケーション特論Ⅱ 授業実施報告

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/highereducation/storytopic/15/>

学生指導映像作品 (北海道大学総合博物館)

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/highereducation/article/170/>

学生指導映像作品 (YouTube 掲載)

世代をつなぐ博物館コミュニケーション

<http://www.youtube.com/watch?v=Q9Wnj7ci bMw>

北大博物館に行ってみよう！ ～北大正門から博物館までの道案内～

<http://www.youtube.com/watch?v=ABJdE5Eh 5cY>

We're always looking for something NEW!

<http://www.youtube.com/watch?v=IgxTFTRp eVs>

Museumense

<http://www.youtube.com/watch?v=as632NW1 gdk>

博物館がつなぐ「モノ」「コト」「ヒト」

<http://www.youtube.com/watch?v=mbkVrfoi pr4>

何かな何かな？

<http://www.youtube.com/watch?v=99jYoBhf jcg>

北海道大学総合博物館～北大 130 年の歴史と成果～

<http://www.youtube.com/watch?v=00P1s8fS ljs>

不思議発見！北大総合博物館

<http://www.youtube.com/watch?v=isJjnUal Bj8>

Welcome to Hokkaido University Museum!

<http://www.youtube.com/watch?v=XZ4rhVJw NYA>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 良治 (FUJITA YOSHIHARU)
北海道大学・総合博物館・助教
研究者番号：40515102

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし